

## 川下の風景⑫

### ～人生は川の流れるように～

米津 達也

#### 【批評家ではなく、視点を工夫して想像する】

この連載を続ける際に、自己反省の意味を込めて、そうしようと決めたことは「人の暮らしに関して、批評家めいたことは止めよう」だった。仕事の上では、何かと批評家めいたことを言ったり書いたりするが、せめてここに書く人々の暮らしの描写だけは批評ではなく、高齢者を含む当人や家族、地域や社会の暮らしを、できれば当事者の視点で描くことに意味があると思えた。初回こそは割と写實的、映画で例えるなら小津安二郎の視点で描いたが、回を重ねるごとにそういったカメラワークに限界も来て、あれやこれやと視点を変える作業を手探りで続けている。そもそも、境界線の外側にいる私が当事者ぶって描くことに無理もあり、そういった意味では、なるべくリアルな当事者の暮らしを捉えようと、アップにしてみたり、引いてみたりとカメラワークを駆使したともいえる。何が正解か言うよりも、今の私が眼前のクライアントの暮らしを支援者としてどう視ているか。もしくは、支援者が視ているクライアントの暮らしを、私が更に外からどう視ているか。人の暮らしに対する批評家ではなく、支援者として想像力を働かせて描くことに意味がある。だから手探りでいろいろ試行錯誤を重ねながら言語化することは、普段の業務では行わない作業なので、私にとってもとても役立つ機会と考えている。

#### 【カテゴライズされることへの苛立ち】

その退院支援看護師は私が差し出した入院情報提供書を手に取り、熱心に私が語るクライアントの物語に聞き耳を立てながらこう言った。「よくあるパターンですね」その台詞を聞いたとき、胸の中がモヤモヤと気分が悪くなり、頭がカッと熱くなるのを感じる。入院したクライアントは中重度の認知症がある。まだ後期高齢者に差し掛かったばかりだが、不意の転倒で骨折し入院となった。身体機能的には回復は見込めるが、認知機能的にリハビリテーションに対して指示が入るかどうかが手術後の行く末を決めるようだった。自宅は介護者であるパートナーと二人暮らし。子どもたちの支援は期待できない。互いに後期高齢者、老いた者が、老いた要介護者の生活を支えなければならぬ。そんな二人の暮らしに葛藤やスト

レスが無いわけがない。これまで歩いて生活していた者が、退院後は歩行にも介助が必要となれば、根本的に二人の暮らしを揺るがしかねない。

確かにそれは高齢社会においては「よくあるパターン」かも知れない。そんな個別の事情にいちいち付き合っていたら、これからの医療資源は持たない。

「リハビリテーションに指示が入るか入らないか。今後の回復見込みが高い人を優先に決めている」

骨折後のリハビリテーションを受ける機会すらカテゴリー化されて決められる。診療報酬、地域医療連携クリティカルパス、理屈では分かっている。だが、私は医療経営者ではなく、眼前のクライアントの暮らしを支援するひとりである。理屈よりも、どこか不当に、クライエ

ントの暮らしを想像すらできず、理解に及ばない支援者を目の前に据えて怒っている。

#### 【誰の理解か、その先の怒り】

90歳を越えた祖母と孫の二人暮らし。老いてもなお祖母は孫を心配に思い、あれやこれやと家の世話を焼いてくれる。世話をされる孫にとっても祖母は親代わりの存在で、孫は介護者として祖母に関わっている。互いがケアを行うことでケアされている。それは前述の老夫婦にしても同じだ。しかし、この親密な相互関係には行き過ぎるが故のアクシデントも度々起こる。言動の暴力。それは常日頃ではない。暮らしの中でストレスが募ったとき、不安が増した時に突発的に発生する。そして、後悔は不安を呼び、自己嫌悪に苛まれる。小さな境界内での親密な関係が時に仇になる。祖母と孫の間でもそのようなことが起きた。

高齢者虐待問題を取り扱う地域包括支援センターは、その通報によって早期介入を切り出した。虐待予防策、というのは分かる。介護者による殺人事件。ネットニュースでも時折報じられる。そこにある苦悩、特異性、しかし事件は報じられることで一般化され、一般予防策として対策が講じられる。つまり「虐待リスクあり」とカテゴリー化されるなかで、境界外で支援者がこぞって集まり「あれや、これや」と原因探しが始まる。これまで主になって担当してきた支援者は一番クライアントの暮らしに近い位置に立つ。そこから見ている暮らしの風景からは虐待リスクなど無いし、そうやって周囲が人の暮らしをこねくり回している様子に我慢ならない。ここでもまた、支援者の理解のズレに対する怒りが沸いている。

しかし、これは誰の理解なのか。一番クライアントの身近にいる支援者の理解。確かにそれは一番暮らしの理解に近いとは思う。だが、それ

が正解とは言い切れない。少し冷静に考えれば分かることだが、そこに怒りを感じるのは「私が理解しているクライアントの暮らし」を誰かに否定されている気がするからだ。こういうことはよくある。事例検討会などは最たるもので、事例提供者の理解においてケースを机上に乗せる。それに対して周囲から「これはこうだ」「あれはこうなんじゃないか」といろんなことを言われて事例提供者は不安と怒りに苛まれることが多い。だから事例検討会における事例提供を避けたがる支援者は多い。

#### 【ケアすることでケアされる】

クライアントと支援者の二者間においてもそんな関係性が成り立っている。これは介護とか支援に関わらず、人が暮らしを営む上では欠かせない関係性だが、援助関係という特殊性においては顕著になる。最近では支援者が行っている「支援」を観察することが増えたおかげで、少し援助関係の見方が変わった。避けられない事実と関係性、それによって負わなくても良い怒りや不安が、どこかで連携の軋轢を生んでいる。上手く行くとエンパワメントされる関係性が、何故上手く行かなくなるのか。どこかで「支配」的な意識が生じると上手く行かない。本来、100%他者を理解することは不可能だ。そういう不可侵な領域を互いに持つから対話関係は成り立つが、親密関係に陥るほどに「理解」した気である。そして、いつしか「私が理解したあなた」が支配意識を生み、それに応答しない事態が発生するとストレス関係を生じさせるのではないか。そういう意味では、あなたの理解は不完全（自他共に変化する存在）であるということを示唆するのも、境界外の支援者の役割と思える。

2023.11.22 米津達也